

国立国語研究所学術情報リポジトリ

文献レビュー6 Fingeret, H. A. (1983) “Social Network: A New Perspective on Independence and Illiterate Adults”

メタデータ	言語: ja 出版者: 国立国語研究所 公開日: 2023-11-02 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 富岡, 花 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/0002000103

Fingeret, H. A. (1983)

“Social Network:

A New Perspective on Independence and Illiterate Adults”

Adult Education Quarterly, 33(3), 133-146.

富岡 花

監修：角 知行

2023年10月31日

本論文で Fingeret は、成人非識字者が社会的ネットワークを形成し、そのなかで他者とお互いのスキルなどを相互交換しており、自分自身を（誰かに）依存的であるのではなく、相互依存的であると見ていたことを主張する。

1. 問題提起

筆者は、リテラシーが現代社会における能力と自立（独立性）の基本だという教育者の考えを問題提起している。こうした考えの結果、批判はされていながらも、教育者が学習者を無能、無力、非識字などという用語で捉え続ける現状につながっていることを指摘する。

2. 必要性

成人非識字者をかれらの社会的世界のなかで理解する必要性が今日の教育者には問われていると筆者は述べる。本論では、今まで明らかにされてこなかった、非識字者が読み書きできないことで、依存的であり、無能な個人であるという偏見が現実とはどのように異なるかを詳しく検討する。また、成人非識字者（限界的識字者）の自立（独立性）と能力を支えていると考えられる、彼らが生きている社会構造はどのようなものか。非識字者は、自らを自立（独立）していると捉えているのか。そうした自分自身の捉え方は、かれらの文化的視点と、より大きな識字社会とで相違点があるのか。以上の問を本論で検討する。

3. 調査方法

【文献レビュー6】

本論文で紹介する事例とそのデータは、アメリカ東部の中都市に住む 43 名の成人を対象に 12 か月にわたって行ったフィールドワークで得たものである。筆者は、非構造化インタビューと参与観察によってフィールドワークを行った。

調査対象となった 43 名の成人は、英語を母語とするアメリカ市民である。そのうち、27 名が白人で、16 名が黒人であった。調査対象者の多くは、貧困、犯罪、標準以下の劣悪な住宅、放火などが問題となっている都市部に住んでいたが、数名は中流階級に属し、郊外に住んでいた。43 名のうち、40 名は調査時に小学校 6 年生のレベルに相当する文章を読むことができなかった。そのうち多くは、それよりも低いレベルの読み書きができなかった。この 40 名のうち半数近くは、調査時に識字教育プログラムに参加しており、残りの半数は調査時には参加していなかったが、多数は参加した経験を持っていた。また、43 名のうち 3 名は、識字教育プログラムによって、読み書きができるようになった「成功者」だった。3 人は、識字者と非識字者としての個人生活に関する比較情報を提供した。

この調査で得られた知見は幅広く、多様であるが、本論で紹介する事例とフォーカスする点は、社会の構造と成人の読み書き能力の有無によって関連するとされている依存性と自立性（独立性）との関係である。また、この調査で得られた知見が成人の識字教育プログラムへの参加または不参加に示唆することも本論文の結論で言及する。

4. 調査結果の分析

4.1. 社会的ネットワークのメンバーと読むタスク “Social Network Membership and Reading Tasks”

フィールドワークを行うにあたって筆者は、成人非識字者（限界的識字者）が社会から疎外されていると想定していたが、調査を進めるにつれて厳しい状況にありながらも、豊かで、非常にインタラクティブな社会状況が見えてきた。成人たちの幅広い交流を目にした筆者は、自身が持っていたコミュニティの概念を再検討する必要があることに気づいた。

この調査で観察された非識字者にとってコミュニティは、安全とサポートを提供する社会的関係性のネットワークであり、主に対面での交流が行われる場だった。筆者は、各個人のコミュニティを「社会的ネットワーク」と表現した。

どの成人も読み書きタスクを手伝ってくれる「代読者」が最低 1 人はいる社会的ネットワークを持っていた。そして、非識字者が代読者となる人に協力を求める際、かれらは誰に協力を頼むか選択していた。読んでもらう内容によっては、個人情報共有することになるため、信頼関係をもっている人に協力を依頼していた。また、協力を依頼する頻度を最小限にするため、形式的な読み書きタスクには自ら取り組むようにする姿勢も見られた。例えば、一般的な申請書の形式は似ているため、何をどこに書くべきかを最初は代読者の助けを借りながら、その経験から学ぶようになっていく。専門的な読み書き能力が必要とされる場合は、その内容に対応でき、かつ信頼できる人とのネットワークを持ち、協力してもらおうが、常に協力を依頼するのではなく、自分でも対応できることにはテーブルコー

【文献レビュー6】

ダーなどを活用して対応する成人もいた。

識字者が本、新聞、雑誌を活用して情報を得るように、非識字者もそれと同じような基準で他者に代読を依頼していたことが様々な事例から観察された。こうした社会的ネットワークは、お互いが持つスキルの相互交換によって機能して、その重要性は常に認識されていた。また、多くの成人は自分のネットワークの中で対等に扱われていた。成人非識字者は、文字情報を解読することはできないが、かれらは常に自分が置かれている社会を読み解いていた。必要と思われる情報の内容に応じて、誰に依頼するか、自分の社会的ネットワークに誰を含むかなどの選択をしていた。

成人非識字者は、識字社会の制度、規範、システムとの接点が最小から広範囲までの連続体に置かれて見られることがある。その接点が増えれば増えるほど、解読のタスクは、複雑になり、ネットワークメンバーに求める知識やスキルも変化していく。識字社会の制度、規範、システムとの接点が多く、広いネットワークを「コスモポリタン」、その接点が少なく、狭いネットワークを「ローカル」と筆者はよんでおり、その二つについては次の2節で説明する。

4.2. コスモポリタン “Cosmopolitan”

筆者は、広いネットワークをもつ非識字者のことを「コスモポリタン (Cosmopolitan)」と表現し、その一例としてトニー (仮名) を紹介した。トニーは、会社を経営する公的立場に立っており、識字者として日常を過ごすことができ、大きな識字社会の要求と制度にも問題なく対応できている。トニーの社会的ネットワークのメンバーは、全員、読み書きができ、専門知識を持っている。トニーはかれらの協力を得ながら、新しい知識を得ていると話していた。トニーは限界的識字者であることによって生じる葛藤にももちろん言及していたが、彼は自分で情報を得るためにテレビやラジオを活用し、メモ代わりにテープレコーダーを使うなどして、情報機器を広範囲に活用していた。トニーの社会的ネットワークメンバーは、彼のことを興味深く、寛大で、有能な助人、友達、仲間だと評価している。トニーと彼の社会的ネットワークメンバーとの関係は、決して一方的なトニーの受け身ではなく、相互作用的 (互惠的) な関係であった。

もう一つの例として、サービス業などに従事する成人を紹介している。ポリー (仮名) は、ホーム・ヘルパーとして地域で働いていた。ポリーは、9人兄弟の1人でもあり、娘もいて、広い親族関係を持っている。また、ある団体の代表なども務めており、職業柄もあって、地域のリーダー、看護師や医師、教師、幼馴染などを含む幅広いネットワークも持っている。こうした様々な人が関わり、不均質な広範囲のネットワークは、ポリーに継続的な学習と成長の機会を提供していたと筆者は説明する。

4.3. ローカル “Local”

前節の「コスモポリタン」とは反対に、エスニシティや階級につながった狭い社会と地

【文献レビュー6】

域に暮らし、物理的な移動もあまりせず、均一（同質）な社会で生きる非識字者を「ローカル（Local）」と筆者はよんだ。かれらの主要な社会的ネットワークは、親族（血縁者）であったが、同僚や友人も含まれていることも多かった。ローカルと呼ばれる成人の多くの社会的ネットワークには、最低でも1人の代読者がいたが、代読できる人よりも読み書きができない人の方が多かったため、ある特定の難解な文字情報の解読には1人ではなく、複数人で協力することもある。

ローカルの成人非識字者の多くは、非熟練または能力が不十分な労働者として働いていた。仕事では、読み書き能力がかれらに必要とされることはなく、コスモポリタンの成人識字者との交流も、かれらの上司や雇用主などを除くと、ほとんどなかった。成人非識字者の多くは、経済的に困窮した生活をしており、生計を維持しながらも、自分に対し肯定的な見方を維持することに葛藤していた。筆者は、こうした状況において社会的ネットワークの必要性は高いと主張する。

筆者は、ここで2人の事例を紹介しており、そのうち1人の白人男性は、機械操作技能を持つロジャー（仮名）である。彼の社会的ネットワークでは、読み書き能力よりも彼の機械に特化したスキルの方が必要とされていた。このように自身の自立性（独立性）を維持している成人非識字者は、社会的ネットワークの内側で強い関係性を持っている傾向がある。

しかし、ローカルの成人非識字者のなかには、相互に互恵的な関係を持たない、社会ネットワークの内側が不均等である場合もある。その例として、家にひきこもりがちで、家事や育児をする女性、マーガレット（仮名）の事例を紹介している。マーガレットは、夫と子どもたち以外の人とあまり関わろうとせず、社会的関係性をあまり築こうとしない。彼女との対話で筆者は、社会から身を引いて、社会から自らを切り離す姿勢が見られたと述べる。しかし、筆者はマーガレットをはじめ、同様の成人非識字者が誰かに（マーガレットの場合、彼女の夫）依存的状況にある理由は、読み書きができないからではなく、社会とうまく関わる力を持っていないからだと考える。

識字社会では、読み書き能力が人間社会への積極的な参加の指標とされるが、実際には、様々な参加の仕方（モード）があると筆者は、Stanley（1978）を参考にあげながら指摘する。読み書きができないこと自体が、依存的状況にいる成人非識字者が極端に社会から疎外される原因にはならないと考える。また、成人非識字者の生活環境で典型的とされる貧困、犯罪、劣悪な住宅環境、不健康の状況は、読み書き能力を持っているか、持っていないかが原因ではないことを合わせて指摘している。

5. 結論（考察・先行研究からの知見・研究の意義と課題）

5.1. 考察と解釈 “Discussions and Interpretations”

分析結果を踏まえて、筆者は成人非識字者が自身をどのように捉えているのか。依存ま

【文献レビュー6】

たは自立（独立）していると捉えているのか、また識字社会からのまなごしをどう感じているのか、自分自身の見方と相違があるのかを考察し、識字教育プログラムの問題にも言及している。

まず、筆者は、ローカルかコスモポリタンかの明確な境界線はなく、非識字者が取り込まれている様々な社会・文化的な環境と対応していると説明する。一つのスキルや特質によって、個人をローカルまたはコスモポリタンと定義することはできず、様々な要素が組み合わさってローカルまたはコスモポリタンかのイメージは形成されると説明する。

また、識字社会が非識字者に対して向ける勝手な偏見（対応能力の不足などの偏見）が、かれらの意図的行動の経験に影響していることを筆者は指摘する。その上で、自立性（独立性）には、非識字者が実社会の中で自身の能力に気づくことが必要であると主張する。

識字社会では非識字者を依存的と見るかもしれないが、非識字者が代読してもらう代わりに読み書き能力と同等の価値を持つスキルや助けを提供するとき、読み書きできないことが「依存的」であるという規定はなくなると筆者は主張する。このように、非識字者が自分自身に対して持つ視点と、識字社会から自分たちがどのように見られているかの考えには、相違点が生じている。こうした識字社会からの偏見を払拭することにプレッシャーを非識字者は感じている可能性があり、それに対する反応として識字者のことを「机上の学問」は持っているが、「常識」を持たない人たちというステレオタイプを抱くかもしれない。

成人非識字者は、一つの均質なイメージを持っているのではなく、様々な特質を具象化している。筆者は、識字プログラムが非識字者を「不十分で依存的である」という均質なイメージをもち続けることの問題を指摘し、その姿勢を改める必要があると主張した。

5.2. 文献からの展望 “Perspectives from the Literature”

筆者は、これまでの文献と先行研究で、社会的ネットワークがリテラシーとの関係でどのように捉えられてきたかを説明している。

成人基礎教育の教育者は、社会的ネットワークと親族関係の重要性を 60 年代から指摘してきた。しかし、非識字者ネットワークの内部ダイナミクスに関する詳しい分析も、自立性（独立性）と非識字とネットワークの成員の捉え方の関係の詳しい分析もまだ不足していると筆者は指摘する。

また、「社会的ネットワークは、伝統や義務とのつながりにより、流動性の妨げになる保守的な力とみなされることがよくある」（p.143）と筆者は述べ、社会的ネットワークに批判的な考えを示す先行研究があることを説明する。そうした社会的ネットワークに否定的な考えに識字教育プログラムも立っており、異文化間のコミュニケーションと理解を目的とするよりも、文化的変容を目標とすることに重点を置いてきたことを筆者は指摘する。例えば、Hunter and Harman(1979)は、非識字者を、かれらの個人的アイデンティティーの源となるかれらのコミュニティから切り離すことはできないことを示唆した。

【文献レビュー6】

筆者は、これまで多くの社会学者や教育者が、識字文化と識字の伝統が支配する社会で、非識字者は自らの能力を十分に発揮できないと主張してきたことを批判している。成人の識字能力に関する研究のなかには、「成功」の定義の一つに読解能力を基準とするものがあった。また、読み書き能力がより高度な知的能力につながると考え、非識字者は低い発達段階にいるという見方もあった。しかし、Scribner and Cole (1981)や Lockridge(1974)等の研究はその反証を示しており、かれらの研究がリテラシーの本質、リテラシーによってもたらされる成果、そして非識字者が識字社会で有能に、自立的な生活を送ることができる可能性についてのこれまでの仮定に大きな疑問を投げかけていると、筆者は述べる。

5.3. 含意 “Implications”

筆者は、現在の識字プログラムを批判し、現状のままだと成人学習者が社会的ネットワークから疎遠になりかねないことを指摘した。それは、既存の識字教育プログラムが成人学習者をコミュニティから切り離そうとするからである。米国に既存する識字教育プログラムは、社会的行為よりも個人指向であり、例外を除いてほとんどの場合、成人非識字者とその社会的ネットワークを無視していることを筆者は問題として指摘する。

加えて、筆者は、読み書き能力を習得することで非識字者個人に起こる変化について言及している。読み書きができるようになるにつれ、社会的ネットワークの関係も変化しなければならないことを成人学習者は認識していると筆者は考える。読み書きができるようになることで、他者のニーズに応える時間も減るし、自身のニーズも変化するからである。こうしたことから、識字教育プログラムは、非識字者をネットワークのなかにいる個人として受け入れられるようにならなければならないと主張する。

続いて、今後の研究課題として、社会的ネットワークと識字プログラムへの参加の関係をより詳しく探る必要があると筆者は考える。そして、明らかなこととして、社会的ネットワークを障壁ととらえるのではなく、強さの源（ソース）として理解するプログラムや教育デザインを模索する必要があることを主張する。具体的には、プログラムの企画者は地域で時間をかけて、そこでのネットワークの構造を調べることで、そして教育者および指導者は教室編成によって人為的に新しい社会集団を形成しようとするのではなく、既存の社会集団と協働することが必要だと説明する。

最後に筆者は、非識字者の社会で得られる機会が識字者よりも実際に限られている現実を踏まえながら、識字社会での教育の必要性を強調している。ただ、その際に社会的ネットワークを無視した教育であってはいけないというのが本論文での筆者の主張であろう。

6. 便益

本論文では、非識字者の社会的ネットワークを明らかにした。そのうえで彼らが決して誰かに頼らざるを得ない、「依存的」な人々ではなく、協力者に自分もつ能力とできることを提供し、相互依存的（互惠的）であることを示した。非識字者を「依存的」と捉え

国立国語研究所共同研究プロジェクト「定住外国人のよみかき研究」

【文献レビュー6】

る考え方を問い直し、事例とともにそれを示したことが本論文での大きな成果であろう。さらに、これまでの識字教育プログラムのあり方と問題を指摘し、プログラムの計画と運営において重要な点を指摘したことから、識字教育プログラムにも役立つと考えられる。

本文献レビューは、国立国語研究共同研究プロジェクト「定住者外国人よみかき研究」の研究成果である。また、本文献レビューの内容に対する責任は本プロジェクトが負う。